

## 草地研究施設

東北大学農学部附属草地研究施設が官制化されたのは昭和46年度であるが、その前身は、昭和34年度に草地研究のための教官定員2名(助教授, 助手)が川渡農場内に認められ、「草地農業研究施設」と学内的に俗称されたものに由来する。東北大学では、それ以前にも農学研究所の吉田研究室で、戦時中から草地研究が手がけられ、戦後農学部の発足以降は、畜産学科を中心に農学科や農芸化学科、さらには農学研究所、理学部生物学科等の有志教官による飼料作物・草地の研究活動が始まっていた。このような背景のもとに、上記の草地研究定員が認められたわけであるが、それと前後して、第1回目のロックフェラー財団から研究資金援助があった。

定員化を得た草地研究の助教授として、昭和36年11月に林兼六が、助手として昭和37年2月に小島邦彦が着任した。2人の研究活動は、農学部・農学研究所・農場の共同利用となっていたブロック建て(当時としては川渡農場における唯一の木造以外の建築物)の「草地農業実験所」をベースに、実験室および試験圃場を整備することから開始された。ちょうど、ロックフェラー財団からの第2回目の資金援助による草地研究プロジェクトが始まる時であったから、一部それに参加しながら、現地にいるものとして、農場側との各種業務調整にも努めた。草地研究室(教官2名のほか技官3名)における研究は、林が「草類の嗜好性」、小島が「草類炭水化物の生理特性」を主テーマとし、研究室をあげての研究としては「牛の放牧による肉生産」を採りあげた。この研究には、農場教官として着任した太田実助手(現助教授)も参画し、昭和40年代末まで10年以上いろいろの形で継続された。

昭和44年3月末に、小島助手が農学部土壌肥科学講座へ転出したため、同講座博士課程終了直後の菅

原和夫を採用した。菅原助手の研究内容は、小島助手のそれに類似したものであったが、放牧関連の研究にも積極的に参加した。昭和46年度に、草地研究施設の草地利用部門が、農場の教官定員2名(助教授, 助手)の振替えて認めれ(教授, 助教授, 助手の教官定員3名のみ)、まず林が昭和47年2月に教授として選考された後、菅原助手が昭和47年7月に農場定員から振替えられ、さらに昭和48年8月に伊藤巖が助教授として着任した。

伊藤助教授の研究は、放牧草地の生態に関するものが主であったし、林も太田助教授の協力を得て放牧牛の行動研究に着手したので、「放牧に関する生態研究」が、草地研究施設における主要な研究課題となって現在に及んでいる。変化に富んだ各種の放牧地と数多くの放牧牛に恵まれている川渡農場に立地する当研究施設が、わが国の草地研究のなかでもっとも遅れている放牧研究を手がけ、その中心的役割りを果してゆくことは、関係方面からの期待に応え得るための最善の道であろうと考えている。また、放牧研究とも関連して、野草地および林内草地の研究にも積極的に取組んでいるが、これらは、林畜共用による山地の開発利用に貢献するところ大であると確信している。

当研究施設においては、学部学生とくに大学院学生に対する教育(研究指導)も行っているが、その研究分野もやはり放牧関連のものが多し。しかし今後は、草地学の主流をなす草地生産分野についての研究教育も十分に行いうるよう、最少限もう1研究部門の増をはかり、研究教育体制を強化してゆくことが緊急の課題である。なお、本研究施設で行われた卒業論文は畜産学科の卒業論文題目の項の末尾に示されているのでご参照されたい。

(林 兼六)